

鮭皮靴

同志社大学歴史資料館 学芸員

鋤柄 俊夫

北海道からサハリンおよび一部は本州の東北北部でも知られている鮭皮靴は、アイヌ名で^{chep-keri}チェブ・ケリと呼ばれる冬季の履き物で、大きさによって足首までの長さのものと、膝まで届く長さのもの二種が知られている。本館所蔵の資料は後者であり、靴底からの長さは42cm、靴底の長さは22.8cm、背緒の幅は6cm、残存長は最大で5cmを測る。

素材および成形は、爪先と靴底に1尾分の鮭皮が、甲から上部には3尾分の鱒が使用され^{*1}、甲から上部は、前・後および長い三角形（底辺9cm）に裁断された側面の4枚の鱒皮から構成されている。前・後面の中央部は、寄せて綴じられることで魚本来の丸みをおさえた直線がつくりだされ、前面の鱒皮は甲の爪先付近までおよび、その結果生じた長さの不足を、前面上端に別の鱒皮を幅5cmの帯状に綴じることによって補っている。なお甲上部に鱒の痕跡がみえる。上端の縁には幅6.7cmの黒色の木綿布が付けられ、その前後に綴じられた直径3.5cmの輪を麻紐がつないでいる。鮭皮の靴底は爪先部と踵部をおりまげ、踵部は左右の側縁近くに縦の折りを付け、綴じて立体化をおこない、爪先部はそのまま折り返して長さ11cmの甲の鱒皮とつないでいるように見える。

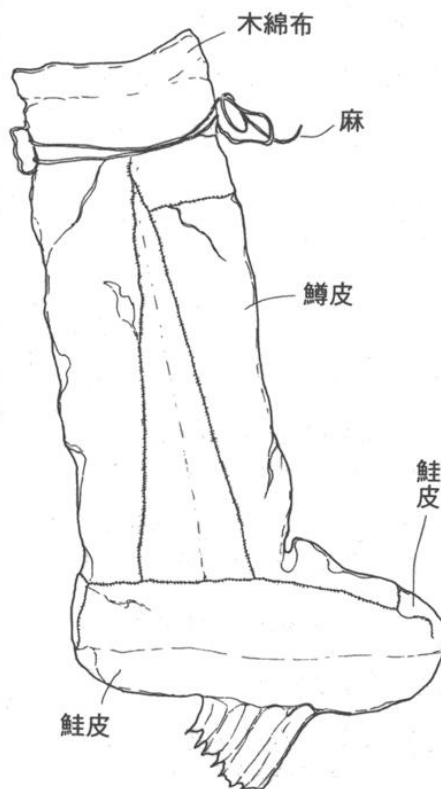


図1: 鮭皮靴

福岡イト子氏の詳しい研究にあるように、鮭皮靴は松平定信の「花月物語」にみえる「えぞの話」や串原正峯の「蝦夷俗話」で江戸時代から知られているアイヌの特徴的な靴で、素足にkeri-or-un-p（靴下）を履き、靴底にkeri-o-munを敷き、さらに上には木綿地のhos（脚絆）を巻いたとされる。なお、雪原にでる際にはこれに桑の木でつくったtesma-ni（かんじき）をつけたそうである。また名称から知られる様に、この靴はアイヌの人々にとって「神魚」とも呼ばれた鮭の皮によってつくることが本来の姿であるが、履さやすさや機能性を求めて、底に丈夫な鮭の皮を、甲に比較的軟らかなアメマスなどの皮を用い、また甲の両側の前半部だけを縫いつける事例のあったことも報

*1 藤村久和氏のご教示による。

告されており、本資料もその範疇に含まれるものと考え。類例は市立函館博物館所蔵資料中であり、道東では魚皮のかわりに獣皮もその素材の一部に用いる傾向がみられるとされており、その点で本例も道央を中心とした地域の所産である可能性が考えられる。

参考文献

- [1] 福岡イト子 1990 「私立高等学校の独自性に基づく特色あるクラブ活動 - アイヌ文化研究 2 実践編 - 」 「日本私学教育研究所 紀要」第 26 号 (1) 教育・経営篇
- [2] 帯広百年記念館 1983 「チェブ・ケリ」 『帯広百年記念館紀要第 1 号』
- [3] 田中忠三郎 1985 「下北の鮭皮長靴」 『技術と民族』 (上) 日本民俗文化大系 13 小学館
- [4] 大塚和義 1987 「サハリン州郷土博物館のピウスツキ資料」 「国立民族学博物館研究報告別冊」 5 号
- [5] 名取武光 1945 「アイヌ土俗品解説」 『噴火湾アイヌの捕鯨』 北方文化出版社